狂撃隊の生活日常

ｉｚｕｍｉ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

狂撃隊の生活日常

【Ｎコード】

Ｎ８３９５Ｘ

【作者名】

ｉｚｕｍｉ

【あらすじ】

これは僕が書いている「私たちの学園生活日常」のスピンオフ作品です。この作品に出てくる狂撃隊の日常を書いたものです。狂撃隊の日常とは一体どんなものなのか、ちょっと裏側を覗いてみましょう。（注：「私たちの学園生活日常」にまだ登場してないキャラも出てきます。と言うか出まくります。）

日常１（前書き）

涼平「おー俺たちの小説かー。」

椎名「でもメインが逃走中だから結構な遅さですよ？」

涼平「マジかー…。」

澪「にしてもオッドアイ多いわね。」

椎名「本当だね。」

涼平「そのこと何だが作者がオッドアイ系が好きだから、自分のオリキャラにもその設定をつけているんだってさ。」

スバル「マジか…。」

日常1

狂撃隊、それは社会に見捨てられた者、行き場を失った者、仲間に裏切られた者などが集まった集団である。

いつもは探し事や依頼などを受けている所でもある。狂撃隊に所属する人数はざっと８０人。

此処は、その狂撃隊達が生活を送る屯所。此処では、その狂撃隊の日常を覗いていこう。

？「あ～…今日も暇だな～。」

この男の名は秋神涼平（あきかみりょうへい）。狂撃隊創造者にして局長を務める男だ。

涼平「あ～…こんな日は信童とかとゲームしたいんだけどなぁ～…。」

いつもは自分の部屋でのんびりと過ごしている。

涼平「暇だなぁ～…。」

？「いっつも暇じゃないんですか局長。」

そう秋神に話しかけて来たのはスバル・アキラ。この狂撃隊の副隊長であり転生者である。

涼平「お～スバルか。何だ？」

スバル「いや、最近なんか鈍(なま)っているような気がして…ちょっと運動でもして体をほぐしたいんですけど…。」

涼平「お前の運動は普通の人に取ったら死に直面するぞ。」

スバル「あ～…そうですね～…。」

涼平「なんかそこらへんの不良でも殴っとけ。」

スバル「へ～い。」

そう言うとスバルはどこかに行き、後から男たちの悲鳴が聞こえて来た。

スバル「さ～てと…依頼は来てるかなぁ…。」

？「局長、誰か来てますよ？」

？「あれ友達ですか？」

涼平に二人の女性が話しかけて来た。髪が金髪のオッドアイのこの少女は雷文寺椎名(らいもんじしいな)。電気を操る少女である。

そして、髪が茶髪でオッドアイのこの女性の名は初音涼萌(はつねりほ)。常にかなりの大きさの筆ペンを所持している。

ちなみに何でこんな名前かと言うと自分の名前の涼と萌をくっつけてそれぞれを音読みした時の一番最初の文字をくっつけた名前であ

る。

涼平「何だ雷文寺、初音。」

椎名「屯所の入り口になんか長髪の男性が立っているんですけど。」

涼萌「んで「誰かー、いますかー。」ってずっと言ってるんですよ。」

涼平「あー多分間違っているんだろう。案内してやれ。」

椎名「はーい。」

涼萌「メンドー。」

涼平「ふぅ…今日も平和だなぁ…。」

ちなみに長髪の男性はその後、警察の方に連れて行かれました。

日常１（後書き）

えー最初でも言った通り逃走中がメインです。

なので更新はかなり遅いと思います。

でもそれでもこいつらの生活を見てくれるなら幸いです。

日常2（前書き）

涼平「あれ？2話目？」

椎名「見てくれてる人たちがいて、うれしかったから第2話目を投稿するらしいんだって。」

スバル「あー見てくれてる人たちがいるのか…うれしいなぁ。」

椎名「でもなんだか逆に恥ずかしかったり…。」

涼平「ほんとだなー。」

椎名「では、はじまりまーす。」

日常2

―森―

椎名「よっ！はっ！」

今、雷文寺は此処で特訓をしている。何の特訓かと言うとかっこいいポーズを取る特訓である。

涼萌「もうちょっと手を挙げた方がかっこいいと思うんだけど…。」

んでそのポーズを初音に見てもらっている。

椎名「こう？」

涼萌「おーよくなったねー。いいよー。」

椎名「ふぅ…今日は此処までにするか…。」

二人が帰ろうとすると…。

？「椎名ー、涼萌ー。どこにいるのー？」

誰かが二人を呼ぶ声が聞こえて来た。

椎名「あ、この声は…。」

涼萌「おーい、智さーん。」

この女性の名は灼西智（しゃくにしとも）。涼萌はさん付けで呼んでいるが歳は涼萌の方が上である。

涼萌「ん？なんか失礼なことを言われた気が…。」

智「あーいたいたー！今日あなたたちに仕事が入ってるって連絡があったわよ。」

涼萌「へーそうなんですかー。」

椎名「んじゃ早く行こっか。」

涼萌「うん。」

？「ちょ…姉ちゃん…そろそろ…その腕離してくれない？」

智「ダメよ！絶対に努を離したりはしない！だって私は努のことが大好きだからー？」

？「離せブラコンバカ！！」

今智に襟元をつかまれている男子の名は灼西努（しゃくにひとむ）。智の弟で、智はこの弟に溺愛している。

努「俺だって自由に生活してぇのに何でいっつも縛られなきゃならないんだよ！」

智「それはね…努にけがとかしてほしくないから…。」

努「えっ…。」

智「だからいつも私の近くにいてほしいの。」

努「お姉ちゃん…。」

智「…あとはいっつも努の顔が見たいからかな？」

努「え？」

智「努のかわいーい顔がいっつも見れるようにしてるんだー！」

努「やっぱこのブラコンボケえええええ！！！！！」

智「んじゃ帰ろう努？」

努「嫌だあああああ！！！！！！」

椎名「…。」

涼萌「無事を祈る…。」

椎名「不幸ですね…。」

―屯所―

椎名「んで、仕事は…。」

涼萌「えーと…とある場所に行ってどんな所か調べるんだって。」

椎名「なんじゃそりゃ。で、どこ？」

涼萌「えーと…。」

―とある工場―

涼萌「此処か…。」

椎名「なんか不気味だね…。」

？「早く仕事済ませて帰りましょう。」

？「そうですね…結構不気味ですし…。」

今は4人いる。そのうちの二人はさっきの雷文寺と初音だ。そして、一人は容姿が某ゲームの半人半霊の人に似ている燭冥魄神（しょくめいはくしん）と言う難しい名前の人。ちなみに白い魂は無い。普通の人である。何回も言う、某亡霊のことは知らない。

そして、もう一人はなんだか容姿が某アニメの天使に似ている篝（かがり）・シードリアと言う人。背中に何故か羽があって空も飛べる。

涼萌「じゃあ入りますか。」

椎名「うわ…気持ち悪…。」

篝「趣味が悪いですね。」

燭冥「何だこのパイプみたいなのは？気持ちが悪いったらありゃしない。」

涼萌「しかもなんか入ってるし。」

篝「これはキノコ？」

椎名「に顔と手足が生えた？」

篝「…ん？これ、どこかのゲームで見たような…。」

涼萌「気のせいっしょー。」

燭冥「あとでサムルやシードに聞いてみるか？あの人造生命体コンビに。」

涼萌「そうだね、聞いてみようか。メンドーだけど。」

篝「…！おい、これ人じゃないか？」

涼萌「え？」

燭冥「まさかそんな…。」

見てみると確かに人である。

涼萌「人だ…。」

燭冥「おい…ここから先はほとんど人じゃないか？」

篝「そのようですね。」

椎名「でも、何のために…。」

篝「…！誰か来ましたよ！」

椎名「隠れよ！」

？「なぁ…ほんとにこんなことするのか？」

？「当たり前だろ。」

？「人造生命たちを戦闘人にして此処を制圧するための武器にするって。」

４人「！！！」

？「まぁ、こいつらなんかいなくてもできるとは思うけどな。」

？「そうだよな。」

篝「おい…。」

？・？「！？誰だ！？」

籌「その話…じっくり聞かせてもらおうか…。」

涼萌「手加減はしないよー？」

燭冥「私の手にかかればあなたたちは簡単に地獄の門をくぐれますが？」

椎名「久しぶりに…暴れられるね…。」

籌「椎名、決してこいつ等（パイプに入っている奴ら）に危害は加えるなよ。」

椎名「分かってる。」

？「ちょ、侵入者だ「死ね。」ぐわあああ！！！！！」

バタッ

？「ひ、ひぃ…。」

燭冥「安心しろ、死なない程度に攻撃してある。」

涼萌「じゃあ…やる？」

椎名「やろうか…。」

籌「やりましょう。」

？「ひゃ、やめ…。」

「ギャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

涼平「轟ー。あいつら遅いなー。」

澪「そうよね…。寄り道してるんじゃないかしら？」

涼平「あーそっか。」

日常2（後書き）

スバル「俺の出番一回もねえええええええ！！！！！！！」

椎名「…。」

スバル「合掌してんじゃねえええ！！！！！！」

んで今回やっとメインキャラがだいぶそろったぞ。

スバル「何の？」

狂撃隊の。

椎名「メインキャラって？」

まず秋神涼平だろ？あと雷文寺椎名、轟澪、スバル・アキラ、初音涼萌、灼西智、灼西努、燭冥魄神、籌・シードリア、サムルとシード。

椎名「たくさんいるね…。」

後此処に2～4人が加わればメインキャラがそろう。

椎名「ふ～ん。」

じゃあ感想待ってるぞい！

椎名「何その某ペンギン王様みたいな口癖！！」

日常3（前書き）

涼平「今回やっと本編にも出ているドS巫女が出ます。」

椎名「では、どうぞー。」

日常3

椎名「あー…いい物買った。」

？「本当よね～。」

この二人は今、街に来ている。

そのうちの一人は雷文寺椎名。もう一人は轟澪（とどろみお）と言い、狂撃隊のメンバーからはドS巫女というあだ名が付けられている。ちなみに雷文寺とは息のあったコンビである。

雷文寺が買ったのは主にカメラや衣装。意外とアニメキャラのコスプレが趣味である。ちなみにコスプレをさすのも趣味である。

そして、轟が買ったのは人を痛めつけるために買った鞭や、これを食べた人の苦しむ顔が見たいと言う理由で買ったハバネロや、縛って動けなくする縄や、人の恥ずかしい秘密を書きとどめるノートやペンなどドSらしい物を買っている。

澪「次はどこに行きましょうか。」

椎名「えっと…此処が良いなー。」

澪「じゃあ行きましょうか。」

椎名「うん。」

スバル「ポーケーモーンー言えるかなー？」

？「何歌っているんですか…。」

スバル「聞いて分からないか？新バージョンの言えるかなだよ。」

？「歌詞全然違いますから！あとそれ以上歌うのやめて！この小説消される！抹消される！永遠の闇に投獄される！！」

スバル「大丈夫だろー少しぐらい。」

？「全然大丈夫じゃねえええ！！！！！」

今突っ込んだのはシード・ポルノグス。髪が植物になっている人造生命体だ。

スバル「なんか知らんけど世間ではいろいろ騒がしいな。」

シード「まぁたしかにいろいろありますからね…。」

と、そこに…。

？「あれ？何してんの？」

スバル「あ、クルス。」

前からやってきたのはクルス・パートリア。涼萌の名字の女性の姿から髪を下したような姿をしている。そして、大のゲーム、アニメ好きでもある。

スバル「今日の収穫はどうだった？」

クルス「うん！よかったよ！お目当てのものも手に入ったし！！」

スバル「そうかそうか。」

クルス「じゃあ先に帰ってるから！」

スバル「おー、気をつけて帰れよー。」

？「あらあら、こんな所にいたんですか。」

？「お呼びっすよー。」

？「何してんのよ…。」

人込みから3人の女性が出て来た。

一人はサムル・ニャール。頭に猫の耳が生えている人造生命体。もちろん耳はつけ物ではない、実際に生えている。そして、尻尾もある。

もう一人は左目に眼帯をしているプレミア。彼女の周りは常に肌寒く、氷系の技が使える。ちなみに眼帯をしている理由は左目は何かも紋章的なものだからしい。（ちなみに雷文寺にもあります。右手の甲にあります。）ちなみに紋章的なものはしっかりと目の機能はある。

そして、最後は某人気アニメの主人公にそっくりな小萌（こもえ）すずか。性

格は某キャラとは違い、その某キャラの友達であるツインの双子の姉にそっくりなツンデレである。（クルス曰くツンデレ最高らしい。）クルスとはある意味良い仲。

スバル「及びだって？誰に？」

プレミア「局長っすよー。」

すずか「なんか友達が来ているから来いだって。」

スバル「ふーん…んじゃ行くか…。」

シード「帰るの？」

スバル「あったりまえだろ。出て来い！！」

ポン！！

スバル「じゃ、なんかあったら報告な。」

プレミア「分かりましたー。」

涼萌「絵を書くのは楽しいな～♪」

屯所では初音が絵を書いていました。

日常４（前書き）

スバル「レギュラーっていつそろうのかな…？」

プレミア「さあ。」

日常４

―商店街―

現在狂撃隊のうちの何人かは商店街にいる。理由はなんか暇なので近くの商店街を見に行こうってことになったのだ。

涼萌「なんか適当な説明が流れたような気がしたけど。」

涼平「それは奇遇だな。実は俺も思ったのだ。」

椎名「私もです。」

？「わたしもー！」

？「…。」？金髪の子を見つめて鼻血を垂らしている。

知らない人がいるので説明しよう。

一人は某人気アニメの黒髪の子にそっくりな秋神涼（あきかみりょう）。涼平の妹だ。

もう一人の鼻血を垂らしている人は秋神涼音（あきかみすずね）。涼平の姉だ。

ちなみに姿はシ〇〇ムにそっくりである。

涼音「あはは～…なんかもうこのまま逝ってもいい気がする…。」

涼平「お姉ちゃーん！！もうちょっと生きて！！なるべく生きて！！！」

涼「どうしたのお姉ちゃん…。」

パアァァ…。

涼音「ブハァ！！」？鼻血が思いっきり出た。

涼平「お姉ちゃあああああああああん！！！？？？」

涼「ええええええええ！！！？？？」

スバル「ギャグじゃん。」

涼萌「そこ突っ込んだらアカンよ。」

澪「あんなー私はこんなグダグダ漫才を見に来たんじゃないのよ。もっとチャキッとした漫才見せてーな。」

椎名「何故エセ関西弁！？」

シード「そして漫才じゃないよ。」

プレミア「ってかこのメンバー多すぎない？なんか周りから結構見られてる気がするんだけど…。」

サムル「気のせいですよー。」

スバル「絶対に多分じゃないぞ。」

智「努～逃がさないわよ～…。」

努「うわあああああ！！！！！！！！！」

？「みんな～…待って…。」

このからだの弱そうな女の子は卓星美海（たくぼしみみ）。体が弱く、基本的には車いす移動だが、今回は歩いて行くと自分で言い張ったのだが案の定の結果になった。

スバル「しょーがねーな…。」

そして、スバルが美海を背中に背負った。

美海「あ、ありがと…。」

？「だから無理するなって言ったのに～。」

この子は海風姫花（うみかぜひめか）。涼平もよくわからないらしいが自分のことを人魚と言い張っている。多分とある作品の羽〇〇小鳩と同じと言っている。（涼平談）

姫花「だーかーらー本当なんだってば！！」

椎名「な、何に向かって言ってるの？」

？「そんな馬鹿はほっといて楽しもうじゃないか雷文寺。」

んでこいつはアリシャア・K・K・フロールスキー。（アリシャア・

カマンベール・カムイ・フロールスキー）見た目は普通の女子だが実は吸血鬼で現在１０００歳以上らしい。ちなみに吸血鬼の苦手とされるにんにくや日光、十字架は平気である。

アリシャア「なんかこいつって言われた気がしたんだが…気のせいか？」

プレミア「あと何か名前少し変えられてるしね。（アリシアだった所がアリシャアになってるし。）」

篝「ほんとですね。卓星も。知美（さとみ）だった所が美海になってますからね。」

アリシャア「？」

美海「何のこと…？」

スバル「おらおら、ボーっとしてるとけがすんぞ。」

アリシャア「うるさい。」

スバル「何だと？」

アリシャア「うるさいんだよこの無駄脂肪！！」

スバル「ああ！？自分にないからってやつあたりってか！？無い物ねだりか！？」

プレミア「ちょ、ケンカはよくないよー…。」

アリシャア・スバル「うるさい！！！」

プレミア「うわっ！！」

涼平「どうどうー。」

アリシャア・スバル「馬か！！！！！」

涼平「仲良くー。」

アリシャア・スバル「ふん！！」

テレッテレレレ…。

アリシャア・スバル「マ〇オか！！！！」

篝「長谷川さんですか？」

アリシャア「違うわ！！」

スバル「何でここで〇魂！？」

その後、いろいろ楽しみました…。

皆「「「「「飛ばすなああああああああああああああああああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！」」」」」

日常４（後書き）

次回、狂撃隊メンバー確認。

皆「？？？」

狂撃隊メンバー（前書き）

サブタイトル通りです。

でも結構？？？で埋め尽くされています。

（メインメンバーには名前の後にメインとつけておきます。）

狂撃隊メンバー

狂撃隊メンバー

?.1　秋神涼平　メイン

?.2　秋神涼　メイン

?.3　秋神涼音　メイン

?.4　???

?.5　???

?.6　???

?.7 ???

?.8 ???

?.9 ???

?.10 ???

?.11 ???

?.12 初音涼萌 メイン

?.13 ???

?.14 ???

?	?	?	?	?	?	?
2	2	1	1	1	1	1
1	0	9	8	7	6	5
?	?	?	?	?	?	?
?	?	?	?	?	?	?
?	?	?	?	?	?	?

?.22 ???
?.23 ???
?.24 卓星美海　メイン
?.25 ???
?.26 ???
?.27 ???
?.28 ???
?.29 ???

?.30　???

?.31　???

?.32　???

?.33　???

?.34　???

?.35　アリシャア・K・K・フロールスキー　メイン

?.36　???

?.37　???
?.38　???
?.39　???
?.40　???
?.41　???
?.42　???
?.43　???
?.44　雷文寺椎名　メイン

?.45　轟澪　メイン

?.46　???

?.47　???

?.48　???

?.49　???

?.50　???

?.51　プレミア　メイン

?.52　???

?.53　???

?.54　???

?.55　???

?.56　スバル・アキラ　メイン

?.57　クルス・パートリア　メイン

?.58　小萌すずか　メイン

?.59　籌・シードリア　メイン

?.60　???

?.61　シード・ポルノグス　メイン

?.62　サムル・ニャール　メイン

?.63　???

?.64　???

?.65　???

?.66　海風姫花　メイン

?.67　???
?.68　灼西努　メイン
?.69　灼西智　メイン
?.70　???
?.71　???
?.72　燭冥魄神　メイン
?.73　???
?.74　???

スバル「多すぎないか…？」

狂撃隊メンバー（後書き）

次回は普通の日常に戻ります。

日常5（前書き）

何故か平日に更新。

土曜参観のせいで代休になったのだ。

日常5

―屯所―

スバル「えーお前らー。今から勉強を始める。」

椎名「しっかりと聞くんですよ。」

澪「先生はスバル副隊長、んで補佐は私たち第一課隊長の雷文寺隊長と私、第二課隊長の澪隊長が務めさせていただきます。」

涼萌「えー…メンドー…。」

スバル「そこ。殺られたくないならしっかりと聞け。」

涼萌「はい。聞かせていただきます。」

プレミア「（脅しじゃん…。）」

スバル「今回はコンビニ前にいる不良たちの対処法について勉強を始める。」

姫花「不良ですか…確かに怖くて近づきたくないんですよね。」

クルス「絡まれた時の面倒さと言ったら…。」

スバル「その時に役立つことを今から教えてやろう。」

みんな「わーい！！」

スバル「まずもし不良がいたら…目線を合わせずに無視をするのが一番だ。」

美海「なるほど…。」

スバル「で、もし絡まれたら…。」

プレミア「絡まれたら？」

スバル「まずは無視。そこで殴りかかってきたら相手の拳を避け、腹に一発パンチ、んで股に足蹴り一本したら後は好きに殺れるぞ。」

美海「途中から殴りかかっているんですけど！？」

スバル「大人数で攻めてきたら技を使って払いのけるのが一番だ。」

クルス「それ魔力を使った技を使える人しか無理ですよね！？ってかスバル副隊長や椎名隊長とか轟隊長とかアリシャアとかこいつ（プレミア）とか篝とかにしか無理ですよね！？」

プレミア「今こいつって言ったよね？今言ったよね！？タコ殴りに合わせてやろうか！？」

スバル「そんなことは無い。普通の人でもジ〇ス〇ウェ〇を複数個使えばＯＫ。」

クルス「普通の人は持っていませんけど！？」

椎名「道具店の佐藤さんに頼めばもらえますよ。」

涼萌「誰だよ！？」

澪「私なら力の強い人にしか興味無いからあんなくそ共は眼中にないわ。」

椎名「黙りなさい戦闘狂。」

スバル「と、言うわけで勉強は此処まで。しっかり復讐しろよ。」

クルス「できませんけど！？あと復習の字が違いますけど！？」

プレミア「…ぐちゃぐちゃ…。」

日常5（後書き）

滅茶苦茶になりました。

次回もめちゃくちゃに？

スバル「ちゃんと書け！！」

狂撃隊の仕組み（前書き）

狂撃隊の関係とかどうなっているか書いていなかった。

と、言うわけで今回書きます。

狂撃隊の仕組み

狂撃隊の仕組み

狂撃隊の管理責任者　局長　秋神涼平

隊長をまとめる副隊長　副隊長　スバル・アキラ

その下は五つの課に分けられており、その一つ一つの課をまとめるのが第〇課隊長

ちなみに第五課は二人いる

第一課隊長　雷文寺椎名

第二課隊長　轟澪

第三課隊長　アリシャア・K・K・フロールスキー

第四課隊長　燭冥魄神

第五課隊長　秋神涼音　籌・シードリア

あとはそれぞれに所属する隊士

判明しているキャラで所属しているキャラ

第一課所属　初音涼萌　卓星美海　クルス・パートリア　小萌すずか　海風姫花

第二課所属　プレミア　シード・ポルノグス

第三課所属　秋神涼

第四課所属　灼西努　灼西智

第五課所属　サムル・ニャール

こんな感じになっています

狂撃隊の仕組み（後書き）

スバル「次回は普通の日常らしい。」

能力・技（前書き）

涼萌「今回は日常じゃないよー。」

能力・技

涼萌「所でさー。狂撃隊の皆がどんな能力を持っているかどんな技を使うか知りたい？え？知りたくないって？そんなこと言わずに見て行こうよ～。まずは局長からだよ。」

秋神涼平

能力

『幻覚・幻聴を相手に見せる能力』

技

無し

涼萌「局長は能力だけなんだよねー。まぁあれ無茶苦茶やばいんだけど実際には…次はスバル副隊長だよ。」

スバル・アキラ

能力

無し

技

静寂の鼓動…手から魔力のビームを打ち出す技。

雷電の怒り…両手から電気を放電させる技。相手をしびれさせて動けなくする。

精神の破壊…目があった相手の精神を破壊させる。破壊された相手は一ヶ月間元に戻らない。

破滅の呪文…相手に向かって何かを唱える技。数秒たつと唱えられた相手の周りが大爆発する。

涼萌「怖っ！えーと続いては私でーす。」

初音涼萌

能力

『どこでも絵を書ける能力』

『絵を実体化させる能力』

技

完全コピー…相手の技を完全に再現できる技。

涼萌「どう私？能力が２つもあるんだよ！すごいでしょ！？続いてはプレミアです。」

プレミア

能力

『冷気・氷を操る能力』

技

冷波…冷気の波を打ち出す技。当たった所は凍る。

絶対零度…相手を一瞬で凍らす技。

冷凍地獄…相手を凍らす技だがこの技の氷は１０００度の炎でも溶けないし、かなりの頑丈さを誇る。しかもかなり冷たい。四か月後経てば溶ける。

涼萌「うわ～…絶対に凍らせられたくない…あと能力がチ〇ノと似

ているのはあんまり言わないで…次は雷文寺椎名隊長です。」

雷文寺椎名

能力

『電気を操る能力』

技

電気の弾丸…電気の塊を打ち出す技。使う魔力が小さいので連続で打ち出すことが可能。

雷…空から雷を落とす技。しかも相手を追跡する。

雷電鳥…体に電気を帯び、ものすごい速さで移動する技。

涼萌「名前からわかるとおり、電気関係の技が多いです。次はドS巫女です。」

轟澪

能力

『式神を呼び出す能力』

技

不明

涼萌「技不明って…何でだろうね…次はチートの噂がある篝さんです。」

篝・シードリア

能力

『相手の能力・技を完全に把握する能力』

技

自身向上…自分の能力などを上昇させる技。身体能力も格段に上がる。

魔力流出…相手の魔力を自分のものにする技。

炎の疾風…炎をまとった風を起こす技。

スケルトンウォール…見えない壁を作る技。かなりの強度。

受け流し…相手の攻撃を受け流す攻撃。ただし複数の技を受け流すのは不可能。

酸素欠乏…相手の周りの酸素を無くす技。

涼萌「技多いな～…。最後はアリシャアです。」

アリシャア・K・K・フロールスキー

能力

『空中を飛べる能力』

『吸血鬼にした相手を操る能力』

技

紅真の光線…紅色の光線を出す技。当たると石化する。

魅惑の眼…目があった相手を自分の思うがままにできる技。

ポイズン液…口から毒を含んだ液を飛ばす技。かなりの猛毒。

ブラッドローズトルネード…紅真の薔薇の花びらが舞う竜巻を起こす技。この技を使ったあとは辺り一面が血に染まる。

涼萌「以上で終了でーす。次回からは本当に戻りますのでー。」

能力・技（後書き）

スバル「俺もうちょっとあるぞ。」

アリシャア「私もだ。」

プレミア「私もありますよ？」

涼萌「そうなの！？」

日常６（前書き）

見てくれる人が少ない。一回一日０ってこともあった。（実話）

スバル「当たり前だろ。」

プレミア「これ二次創作なのに、アニメとかゲームのが出ていないってことが…。」

よし、アニメなどの名前書こう！！

スバル「そうゆう見解？」

日常6

―どこかの工場―

涼平「『不良をなんとかしてください』という依頼が来たのでその工場に４人で来ました。」

スバル「今回は思いっきり暴れていいんだな？」

涼平「工場を壊さない程度でね。」

スバル「よっしゃあああ！！！！」

プレミア「はいはいあほなこと行ってないで行きますよー。」

涼萌「はーい。」

スバル「ちょ、待てよおい！！」

―工場内部―

スバル「あー…こりゃー多いな…。」

涼平「多いな～。」

不良１「あ？何だテメェら？」

涼平「今すぐ此処たちのいてくれないかな？」

不良2「はーはっは！！立ち退くわけねぇだろバカがぁ！！」

スバル「ほー…んじゃやるしかないな…。」

不良3「やるってのか？」

不良1「おいテメェら！やっちまえー！！」

不良たち「おらあああ！！！！！」

スバル「来たぞ…。」

涼平「こんぐらい何ってことないさ。」

不良「おらぁ！！」

涼平「殴りかかるならちゃんと考えて殴った方が良いよ？ほら。」

ガッ

不良「な、受け止めただとぉ！？」

涼平「ほらよ。」

ドゴォォォ！！

不良「ぎゃあああ！！！！！」

不良「女なんて関係ねぇ！！」

スバル「女…？お前言ったな…。」

不良「は？」

スバル「俺は男だあああああああ！！！！！！！！！死ねえええええええええ！！！！！！！！！」

ドガアアアアアアアン！！！！！！！！！

不良「ぐはあああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！！！」

アリシャア「あ～…もう先にやってるな…。」

椎名「ま、楽しもうよ。」

？「そうだな。」

？「精気不味そうなやつらばっかだね～。」

アリシャア「行くぞ、雷文寺椎名、藤曇神士、ミント・ローズ！！」

椎名「はい！！」

神士「おう！」

ミント「久しぶりにやっちゃおうか♪」

なんか新しいメンバーが出て来たので紹介。一人はは藤曇神士（とうどん しんじ）。顔が女顔で髪もロングにしているので（頭にクセ毛が一本）女と間違われやすいが、実際は男である。能力は『影を操る能力』。

もう一人はミント・ローズ。言っていることから分かるとおり、サキュバスである。性別は女で外見は高校生ぐらいの背丈で髪は腰まで届いているロング。能力は『魔力を吸い取る能力』。

神士「俺ついでっぽいことを言われたような気が…。」

ミント「私もよ。」

椎名「気のせいだよ。」

スバル「はっ！！」

ドゴオオオ！！！！

不良「ギャアアァァ！！！！」

プレミア「凍れ！『冷波』！！」

ピキィィィィン！！

不良「ちょ、凍ったあああ！！！」

涼萌「ダイナマイトを実体化～♪」

ポンポンポン

不良「ダイナマイト！？」

涼萌「爆破～♪」

ドドドドドドドドドドドドドドン！！！！！！！！！！！！！！

不良たち「ギャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！！！！！」

アリシャア「うえっ…こいつ等の血、絶対に吸いたくない！」

ミント「やってた？」

アリシャア「なんだミント。こいつらの精気でも狙っているのか？」

ミント「こんなやつらの狙うわけ無いわよ。あなたも血を狙っているの？」

アリシャア「こっちだって同じだ。狙うこと無い。」

ミント「久しぶりにやるぞ～！」

アリシャア「はぁ…。」

―１０分後―

涼萌「こいつで最後かぁ～。」

椎名「やる？」

涼萌「やるでしょ～。」

不良「あ…ああ…。」

涼平「んじゃやるか、みんなで♪」

プレミア「さぁ～覚悟はできてる？」

不良「あ…あ…あああ…

ギャアアア！！」

涼平「依頼完了♪」

日常６（後書き）

日常７に続く。

日常7（前書き）

また新キャラが出ます。

日常7

スバル「あー…今日も平和だなー…。」

椎名「そうですねー…。」

ちゅどおおおん！！！！！

スバル「…またあいつらか…。」

二人が向かった部屋は、煙がもくもくと出ていた。

スバル「おーい、何してんだー？綺羅星ー？」

？「げほっ…ごほっ…ついに…ついに完成したわ…。」

？「やったね…げほっ…お姉ちゃん…ごほっ…。」

この見た目がそっくりな二人は綺羅星初（きらぼしうい）と綺羅星純（きらぼしじゅん）。二人は姉妹の関係で初の方が姉である。

二人は狂撃隊屯所の実験室でいつも薬を作っている。そして、薬の効果は絶大である。（まぁすべて気持ち悪い色をしているが…。）

能力は二人とも無い。

スバル「また薬を作ってたのかよ…で、今回は何を作っていたんだ？」

初「ふふふ…聞いて驚かないでよ…これ！」

スバル「…？いつものように気持ち悪い色をしているが…？」

初「実はこれはね…『幽体離脱ができる薬』なのだよ！！」

スバル「へぇー…幽体離脱ねー…ってえええええええええ！！！！？？？？？」

いつもは『風邪が治る薬』とか『痛みを和らげる薬』を作っているのでこうゆう薬を作ったことはかなりの驚きのようである。

初「この薬を飲むとー体から一定時間魂が抜けだして、自由に動けるようになるのだー！」

椎名「それってすごくないですか！？ノー〇ルもんじゃないですか！？」

純「で、魂の体で他の人の体に取り憑いたりすることもできるのだー！！」

初「ま、実際には取り憑くじゃなくて体の中に入り込むって言う表現が正しいけどね。」

スバル「…ってか何でこの薬を作ってたんだ？」

初「うん、なんか男の人に頼まれて作ってたんだ。」

スバル「それは渡したらだめえええええ！！！！！」

椎名「その人変態ですよ！？渡したら大事件につながりますって！！！」

初「あ、そーか。んじゃ此処に保管して、その人に無理でしたって伝えとくから。」

スバル「うん！それがいいね！」

その後、無理だったと伝えました。

スバル「しかしここにあると危険だな…どこかの世界の人にでも送っとくか？」

日常7（後書き）

またまた騒がしく…。

日常８（前書き）

今回の話は途中から路線から脱線します。

日常8

―どこかの森―

スバル「えー今からー強化合宿を行う。」

椎名「しっかりついてくるんですよー。」

篝「遊ぶのは無しだからな？」

プレミア「で、何でここ何ですか？」

篝「森の中は自然の訓練場だ。いつでも修行ができる。」

涼萌「え～やだよ～…。」

涼平「ちなみに夜は近くのホテルで休むからなー。あ、そうそう…。」

涼平以外「？」

涼平「あそこ幽霊が出るって噂があるんだよなー…３０４号室に女の子の双子の幽霊が出てくるって噂が…。」

スバル「きょ、局長…？脅かすのはいい加減にしてくださいよ…？」

プレミア「そそそそんなのいいいいるわけないじゃないですか～…。」

籌「プレミア…動揺しすぎだ…。」

涼平「んじゃ、そうゆうわけで、頑張ってね。」

全員「…。」

スバル「…はっ！」

どかあああああん！！！！

スバル「ふーっ…よし、これで１０８個目だな…。」

涼萌「ミ〇ル〇の体重とかと一緒ですね。」

スバル「今言うことじゃないだろ。」

籌「はっ！よっ！」

椎名「…スンげー…。滝に切れ目が入ってる…。」

籌「これでも本気だしてませんが？」

椎名「マジかよ！」

やっぱりチートじゃねぇの？

アリシャア「…あ…もうすぐ夜だ…私の活動時間だ♪」

ミント「んじゃ、そこらへんで遊ぶ？」

アリシャア「よし、行こう！！」

―ホテル―

燭冥「いい所ですねー。」

涼萌「うわ～。」

涼平「な？」

スバル「んじゃ、部屋分けしてあるから…それぞれ分かれて！」

全員「はーい！！」

深夜

クルス「う～ん…今何時だろう？」

スバル「今か…深夜1時だ。」

プレミア「此処は確か…！！」

ガクガクガクガク…。

スバル「どうした？」

プレミア「あの…此処…３０４号室何ですけど…。」

スバル「え？」

クルス「ちょ、んじゃ…幽霊…。」

スバル「んんんなもん嘘だって！だったらあいつがいるだろ！！昼間撮った写真で証明できるし！」

クルス「そ、そうか！！」

スバル「お、おい…舞善寺～…。」

？「はい、何でしょうか？」

壁をすり抜けて来たのは舞善寺幽子。死んだ人、つまり幽霊である。

スバル「お前…幽霊探知機とかできるか？」

幽子「何そのダウジングマシンみたいな名前のやつ！？…いや、気配はしま「ガサッ」…何してんですか？」

スバル「いや、ちょっと…タイムマシンを探して…。」

幽子「ないですよ。」

朝

幽子「出ませんでしたよ？」

スバル「そ、そうか…ありがとうな。」

涼平「帰るぞー。」

―屯所―

スバル「ほら、部屋で撮った写真だ。」

クルス「どれどれ…。」

写真を見るとふすまの隙間から４つの目が覗いていた。

二人「ぎゃああああああああ！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

日常８（後書き）

次回、誰が出る？

日常９（前書き）

前回出て来たあれが出ます。

日常9

スバル「よ、よぉー…テメェら…。」

椎名「あれ？元気ないですね副長。」

スバル「い、いやな…。」

？「おーお姉さんの友達多いねー…。」

椎名「…。」

目の前に男の子と女の子の幽霊が二人…。（今喋ったのは女の子の方。）

全員「ぎゃあああああああああ！！！！！！！！！！！！！！！」

クルス「で、あのホテルの幽霊2人が付いてきたって言うの？」

スバル「そ、そういうわけだ…。」

？「私は唐草（からくさ）雲雀（ひばり）でぇーす！！」

？「僕は唐草炎（からくさほむら）です。」

澪「何で女の子が僕って言ってるの？」

炎「いや、僕男なんですけど…昔っから女顔のせいで女の子って間違われているんですけどね。」

椎名「で、どうすんの？」

スバル「いや、さっきな、人形二つ頼んでおいた。こいつ等の器代わりになると思う。」

椎名「そうすか…。」

ピンポーン

スバル「お、来た来た。」

送られてきたのは2体の女性の人形だった。

スバル「じゃ、どうぞ。」

炎「待てええええええええええい！！！！！！！！！！！！！！」

スバル「どうした？」

炎「何で女性の人形だけなんだよ！！どっちか男性のでいいだろ！！何で女性だけなんだよ！！」

スバル「いや、頼んだんだけどな、男性の方が無くてな、仕方なく

頼んでおいたんだ。」

炎「それなら後日頼むとかしておいてくださいよ！！」

スバル「女顔だから問題ないだろ。」

炎「そうゆう問題すか！？」

雲雀「えー炎どっちもかわいいよ？」

炎「そうゆう問題じゃねええ「じゃ、私こっち。」話聞けええええええ！！！！！！！！！！！！！」

んで、その後…。

雲雀「注目！！！」

椎名「何でぷ○の○○ちゃんの台詞真似してるの？」

雲雀「同じユーレイだからデス！」

椎名「そうゆうこと？しかもなんか喋り方も似て来た！！」

炎「マジで恥ずかしいよ…。」

澪「こっちは全く違うわね。」

炎「本当に嫌なんだけど～マジで恥ずかしいんだけど～！！」

雲雀「まぁまぁ、かわいいからいいじゃん。」

炎「かわいい言うなあああああああ！！！！！！！！！！」

ノリのいいユーレイと照れ屋な幽霊が仲間になりました。

日常９（後書き）

日常１０へ続く。

スバル「まだまだオリキャラ出るなこりゃ…。」

日常１０（前書き）

久しぶりの更新だー！！

で、今回はクリスマスに向けてのネタ。

まだ早いですがどうぞ！

日常１０

スバル「おーい、そろそろあれの準備しないか？」

椎名「何ですか、あれって…。」

スバル「決まっているだろ、クリスマスのツリーだよ。」

澪「あーもうそんな時期なのねー。」

スバル「早いとこ買っておいた方がいいと思うんだ。」

椎名「そうですねーじゃあ行きましょうか。」

雲雀「何々～買い物～？私たちも行くよ～！」

炎「じゃあ…僕も…。」

―デパート―

スバル「もう出ているぜ…。」

椎名「じゃあ分かれて探しましょうか。」

雲雀「何がいいかな～あっ！これがいいかな？」

炎「それ…リ〇ク…ってかゲームを探しに来たんじゃないんだけど…。」

雲雀「ホタテ屋？」

炎「ニ〇動かよ！！」

雲雀「そして俺撃墜！」

炎「もうええわ！！」

スバル「このレースなんかいいんじゃないか？」

椎名「いいんじゃないんですか？あとその綿とか…。」

スバル「そうだな…買っておくか…。」

スバル「お前らーなんかあったか？」

雲雀「いいのー？無いよー。」

スバル「ゲーム探してると大体は予想できたが…こうなったか…まぁなんか買ってあげてもいいか。何が欲しい？」

雲雀「あ、今はいいや。」

スバル「え、何でだ？」

雲雀「サンタさんから…ほしいからそれまで我慢する。」

スバル「そうか…分かった。それまでな。」

雲雀「うん！」

スバル「あっ…。」

炎「雪…。」

椎名「見たことはあるんだ。」

雲雀「うん…いっつも私たち二人だけでしか見てなかったけど…お姉ちゃんたちみたいに優しい人と一緒に見るのは初めてなんだ…。」

スバル「そうか…じゃあ手つないで帰ろうか。」

雲雀「…うん！」

スバル「お前の手暖かいな～。」

雲雀「お姉ちゃんもだよ～。」

炎「…。（ドキドキ）」

椎名「ほら、顔こっちに向けて。」

幸せな…クリスマスになりますように…。

日常１０（後書き）

スバル「1週間ぶりだな。」

そうですね～。

日常１１（前書き）

シリアスっぽい？

スバル「今回シリアス物か？」

それはこの小説を読んでから。

日常１１

はぁ…はぁ…はぁ…。

私は今、光り輝く月夜の中を逃げている。

私は逃げなければならない。

私は生きるために逃げなければならない。

？「…。」

タッタッタッ…。

女性「はぁ…はぁ…！！」

追いかけてくる…どれだけ走っても追いかけてくる…。

嫌だ…死にたくない…！

？「…。」

女性「はぁ…！」

？「見ーつけた。」

見つかった…追いつかれた…でも…諦めるわけにはいかないんだ…！

？「往生際が悪いな～君何したかわかってんの？」

女性「あ、あれは仕方なくやったのよ！あいつが…あいつが…。」

？「でも…人を殺すことは…悪いことだよね？」

女性「うっ…。」

？「そんな君には…永遠の眠りと永遠の苦しみを…！」

バァァァァン！！！！！

そこらあたりに血が飛び散った…。

女性を殺したそいつは返り血を浴びて、嬉しそうに笑っていた…。

カンカン！

スバル「はい！カット！！この調子で次も頼みますね！」

え？何してるかって？なんかみんなでドラマを撮ることになったんだよ。

しかも専用スタジオ使ってる（笑）。

涼平「あ～…疲れた…。」

プレミア「局長演技すごかったですね～。」

涼平「そうか？プレミアもよかったぞ～。」

プレミア「いえいえ…。」

椎名「はい、休憩入りま～す。」

智「はい、お水です。」

涼平「お、サンキュー。」

智「どうぞ。」

プレミア「ありがとう。」

澪「次あちらのスタジオで撮りまーす。」

涼平「はーい。」

神士「おい、この小道具ちょっとかけてるぞ。」

ミント「え？…あー本当ですね。誰か新しいの持ってきてくれませんかー？」

サムル「わかりました～。」

シード「これどうする～？」

アリシャア「それは…置いておいてくれ。」

シード「はーい。」

努「本番始まりまーす。」

プレミア「あ、はじまりますよ。」

涼平「よーし、もう一回頑張ってくるか！」

日常１１（後書き）

つーわけでドラマ撮影でした。

つか何で専用スタジオ持ってるんだよ。

日常１２（前書き）

秋なので。（もう１１月だろ。）

前にクリスマスのネタがあった事は無視してください。

日常12

―山―

涼平「おーい、今回はこの山の中で自由行動だ。この山には秋の味覚がたくさんあるから取って食ってもいいぞー。ただ毒キノコには気をつけろよなー。」

全員「はーい。」

涼平「じゃ、自由行動！」

スバル「おー栗だー。」

椎名「たくさんありますねー。」

プレミア「自然のものっていいですね～。」

ミント「？大きい岩がある…。」

アリシャア「う～む…こりゃ飛び越えていくしかないな…。」

その時…。

？「せーの…。」

岩の向こうから声が聞こえて来た。

アリシャア「？この声って…。」

バカァァァァァン！！！！！

岩が粉々に砕け散った。

アリシャア「うわあああああああああ！！！！！！！！！！！！！！！」

ミント「わあああああああああああ！！！！！！！！！！！！！！」

？「ふ〜…壊せた〜…？何してんですかアリシャアさん？」

アリシャア「おい鍵宮！いきなり壊してんじゃねぇよ！！！」

ミント「ビビった〜…。」

鍵宮「すいませ〜ん。」

また新しいのが出て来たので紹介。こいつは鍵宮愛夢（かぎみやあいむ）。手の力がハンパなく強い奴である。あと少し腐女子でドMで携帯を手放せない性格であり、今も携帯を離さず持っている。

鍵宮「いや〜ちょっと邪魔だったもんで。」

アリシャア「だからって壊すことは無いだろ！」

鍵宮「あ、今のツ〇ッ〇ーに…。」

アリシャア「殺したろかあああ！！！！！！（怒）」

燭冥「これは…キノコか？」

？「ちょっと調べますね…あ、これ毒キノコです。」

燭冥「そうか。済まないな。」

？「べ、別にあんたのために調べてあげたわけじゃないんだからね！」

もう一人、出て来たので紹介。この少女はチャーム。喋っていることからして多分いい奴。

チャーム「多分って何よ！！」

篝「…はぁ！！」

ズシャァアアアン！！！！！！！

努「すげー…。」

すずか「滝が割れた…。」

篝「よし、この鮭を持っていこう。」

二人「（滝のことは無視！？）」

澪「この柿もいいんじゃない？」

智「でも渋柿かもしれませんよ？」

澪「いいわよ。苦しむ顔を見れるんなら…。（黒笑）」

智「（うわ～ドSだ～…。）」

涼平「よーしみんな集まったか？それで料理するからな。」

全員「はーい。」

その後、おいしく頂きました。

日常１２（後書き）

チャーム「私が出て来たわね。」

鍵宮「私も名前変えて出て来たね～。」

チャーム「そりゃ変えなきゃダメでしょ…。」

鍵宮「そうだよね～。」

日常１３（前書き）

今日ショッピングモール行きまーす。

日常13

スバル「今日ショッピングモール行ってみるか？」

全員「「「賛成！！！」」」

スバル「おぉ～…さすがはショッピングモール、広いなぁ…。」

涼平「はい、じゃあここから自由行動、当たり前だが迷惑かけるなよ。」

全員「はーい。」

涼平「じゃ、かいさーん。」

椎名「ねぇ、この服どう？」

澪「う～ん、私はこっちがいい。」

チャーム「あれ？副長は？」

智「多分フィギュアかゲーセン。」

チャーム「あ、そう。」

スバル「うおおおおお！！！！！」

涼平「あたたたた！！！！」

美海「局長は違う奴の掛け声でしょ！！」

スバル「おりゃあああああ！！！！！！」

涼平「$＃@★†℃♂〒仝◎！！！！！！！！（何と言っているのか理解不能）」

美海「局長なんて言ってるの！？」

燭冥「何してるの？」

篝「太鼓の達人で燎原ノ舞と〆ドレー２０００の２曲を合わせた得点がどちらが高いか競ってる。」

燭冥「どっちも☆１０じゃん！！！」

スバル「あー…疲れた…。」

涼平「腕死んだ。（笑）」

燭冥「で、どっちが勝ったの？」

スバル「えーと…２４０万３０００と２４０万３２００…って微妙

な差で局長が勝っている！！」

燭冥「つーか2曲ともフルコンボかいあんたら！！」

篝「すごいですね。」

アリシャア「いろんな食べ物の店があるわね…。」

ミント「何か買っていく？」

アリシャア「気になるし…買おうか。」

ミント「いえい！！」

愛夢「これもいいな～あ！これもかわいいな～。」

涼「可愛い小物がいっぱいですね～。」

涼音「これをあーしてこれをあーしたら…。」

涼「お、お姉ちゃん…なんかあやしい人になってるよ…。」

姫花「動物さんたちだ～。」

シード「あー！チワワだー！」

姫花「どれも飼えませんよ？」

シード「えええええ！！！！」

なんかいろいろ遊んで帰りました。

日常１３（後書き）

日常１４に続く。

日常１４（前書き）

狂撃隊のメンバー全員出すの無理だな。

日常１４

涼平「あ～…今日も平和だ～…。」

ミント「よっと！」

涼平「あ、ミント。何しに行っていたんだ？」

ミント「ちょっと精気を吸いに、ね♪」

涼平「へ、へえー…；」

アリシャア「お前また行っていたのか？やめろって言っていただろう。」

そう言うアリシャアの服が赤く染まっていた。

ミント「あなたも人のこと言えないわよ。東〇のフ〇ンなの？」

アリシャア「別にいいだろう。」

ミント「良くないわよ！」

涼平「あははー…；」

椎名「よっ！はっ！」

プレミア「あなたいつも訓練しているね～。」

椎名「当然でしょ？」

涼萌「いっつもキレがいいですね～。」

プレミア「次は何するんすか？」

椎名「電気のパワーを溜めて一気にあそこの不良に放出！」

二人「へー…。」

椎名「行くよ…はぁ…。」

ビビビビビ…。

涼萌「うおわ…。」

プレミア「わわわ…。」

椎名「はぁーーーー！！！！！！！！！」

ビリビリビリビリ！！！！！！！！！！

不良「あ～授業かったりぃ～…。」

バリバリバリバリ！！！！！！！！！！！

不良「ん？ってぐわああああああああ！！！！！！！！！！」

バリバリ！！！！！

不良「ぐぎゃああああ！！！！！！！！」

バリバリバリバリバリ！！！！！！！！

不良「ぐぎょぶばびばむべもぎゃああああああ！！！！！！！！」

バリバリ…。

不良「が…あ…。」

バタン！

不良「ぐ…が…ぶばぁ！（血を吐いた音）」

椎名「…よし。」

二人「あの人死んでないよねーーーー！！！？？？」

初「よーし、次は『性別が変わる薬』を開発するぞー！」

純「おー！！」

初「まずはこの薬とこの薬を混ぜて…。」

純「そしてこうしてこうして…。」

初「…え？」

ボカアアアン！！！！！」

純「けほっ…。」

初「失敗～…。」

炎「あー…何でこんなことしなくちゃいけないのかな～…。」

雲雀「いいじゃん！コスプレぐらい！」

炎「でもな～…。」

涼音「この服がいいな…。」

涼「私はこれ～。」

シード「これ！」

スバル「もういいか？じゃ、オープン！」

ぱぁぁぁぁ…。

クルス「ぶはぁ！！」

クルスは鼻血を出した。

クルス「こ…これは…3次元と2次元が…一体化した…。」

スバル「分かったクルス。もうそれ以上喋るととんでもないことになる。」

今日も平和です。

日常１４（後書き）

日常１５に続く。

日常１５（前書き）

涼音「ってかこれ見てる人いるの？」

作者「います。」

涼平「いるんだ。」

日常15

涼平「夜だなー。」

椎名「夜ですねー。」

雲雀「こーんな日は…。」

涼平・椎名「日は？」

雲雀「やっぱり肝試しでしょー！」

椎名「…え？」

雲雀「つーわけで始めます！」

スバル「いや何でいきなり始まるんだ。」

雲雀「それは勿論…。」

雲雀「私がやりたいからデース！！」

スバル「その体粉々にすんぞ。」

雲雀「やめて！壊さないで！」

轟「壊す前にひもで縛って吊るし揚げて鞭で叩いていく方がいいわよ？」

雲雀「すんごいS発言！」

スバル「それには引くな。」

轟「そう？」

涼音「そんなことよりはじめましょ～。」

雲雀「おおっと！そうでしたデスネ！皆さんにはまずこの階段を上った先にある神社に行ってもらってそこにある赤い色のものを持って帰ってきてください！」

椎名「そんだけ？」

雲雀「こんだけ。」

スバル「よーし、行ってこようじゃねぇか！」

雲雀「んじゃ、皆さん頑張ってくださーい！」

椎名「怖いよ～…；」

スバル「あたしはこんぐらい平気だ。」

涼平「出るな

出るな…。（涙）」

スバル「局長、ビビりすぎです。」

雲雀「行ったね…。」

すると、雲雀は懐からトランシーバーを取り出した。

雲雀「炎ー！プレミアー！シードー！藤曇ー！ミントー！あと吸血鬼さーん！」

アリシャア「何であたしだけそんな呼び方じゃあああ！！！！」

雲雀『落ち着いてくださいよ！ドッキリするんでしょ？』

アリシャア「あたしはやる気は無い！」

ミント「って言いながら来てんじゃん。」

アリシャア「ほ、ほっとけ！」

雲雀『誰かが来たら脅かしてくださいねー！んじゃ！』

ブツン！

雲雀「いひひ！楽しみだな～！」

？「何がだ？」

雲雀「ひいいい！！誰ですか！？」

スバル「何してんだお前…。」

スバルだ。

雲雀「あれ？スバルさん、行ったんじゃないんですか？」

スバル「俺か？俺はずっと自分の部屋でゲームをしていたが…。」

雲雀「え？じゃああれは一体…。」

その時、雲雀は何かを思い出した。

雲雀「（ちょっと待って…確かさっきのスバルさん…一人称が…。）」

椎名「怖いよ～…；」

スバル「あたしはこんぐらい平気だ。」

雲雀「（一人称があたしだった…。普通のスバルさんなら俺なのに…。）」

椎名「暗いよ～何かでそうだよ～。（涙）」

涼平「悪霊退散悪霊退散悪霊退散悪霊退散悪霊退散…。（涙）」

サムル「どんだけ怖がってんですか…。」

涼平「いいかお前ら！絶対に幽霊って言うなよ！（涙）」

椎名「○タ○ドって言って○タ○ドって！」

サムル「これどっかのアニメのネタじゃないですか？」

涼音「銀○バカの作者だからでしょ？」

涼「あれ？スバルさんは？」

涼平「？一緒にいたんじゃないのか？」

椎名「おかしいですね…。」

涼「何ででしょうか…。」

炎「誰も来ないな…。」

？「わっ！」

炎「ぎゃああ！！誰ですか！」

スバル「ひっさしぶりね～炎。」

炎「スバルさん…あれ…でも懐かしい感じが…。」

スバル「あたしよあたし！これ見て分からないの？」

ボン！

すると、スバルの姿は消えて代わりに女子高生みたいな人が現れた。

炎「あ！闇道（やみみち）ねーちゃん！」

闇道「覚えてた？」

炎「懐かし～な～…でもどうやって此処へ？」

闇道「いやぁねぇ…ちょっといろんな幽霊から情報を集めてね…此処に来たんだ。」

炎「へぇ～…。」

闇道「あなたに会えて嬉しかったわ…私はこれで…。」

炎「闇道姉ちゃん！」

闇道「何？」

炎「闇道姉ちゃんも…一緒に来ない？」

闇道「え？」

炎「一緒に…すごさないかって言ってるんだよ！」

闇道「…。」

炎「ねぇ！」

闇道「…明日答えを出すから…待っててて…。」

炎「うん！約束だよ！」

椎名「怖い怖い怖い怖い怖い…。」

涼平「…。」

雲雀「…みんな気絶しましたよ…。」

スバル「しっかし誰だろうな…。」

次の日

涼平「あ〜…怖かった…。」

ピンポーン

涼平「…？誰だろこんな朝早く…。」

涼平「はーい。」

ガラッ

涼平「…誰ですか？」

闇道「闇道詩織です！」

闇道詩織(やみみちしおり)さんが仲間になりました。

涼平「…。」

下の方を見る。

涼平「ぎゃあああああああああああ！！！

日常１５（後書き）

続く。

日常１６（前書き）

１２月に入りましたー。

寒くなってきましたが体を壊さないよう気をつけましょう！

日常16

スバル「あー…寒い…。」

涼平「風邪ひく風邪ひく…。」

闇道「そうかしら？あたしは平気だけど…。」

雲雀「私もですよー。」

炎「僕もです…。」

涼「体二人は人形で一人は幽霊ですからね…。」

涼平「ってか良く成仏しないな…。」

闇道「この世界にいるのが一番楽しいですから。」

涼平「あっそ。」

シード「そう考えると…機械の体のあなたもいいよねー…へっくし！」

？「私でも寒いですよこれ…風邪ひきそうですよ…。」

涼平「ってかロボットが風邪ひくのか？」

？「知りませんよ。」

また新しいキャラが出たよ。こいつは東雲杏（しののめあんず）。簡単に言えばロボットだ。

杏「寒いー寒いー…。」

涼平「寒くて腹痛い…。」

スバル「どうしたんですか…局長…。」

涼平「悪い、誰か袋持っていない？」

炎「僕ありますけど…。」

涼平「すまん。」

そう言うと、涼平はどこかに行った。

スバル「一体なんだろうな…。」

闇道「さぁ…。」

その時…。

「オメェら何してんだ？ああん？」

と、言う声がした。そしてそのあと危険な音がした。

スバル「…。」

雲雀「ん？何の音？」

そして、涼平が戻って来た。

涼平「すまん、あれ捨てちゃった。」

スバル「すいません局長、持って帰ってきてたらしばき倒していましたよ。」

シード「何入れたの？」

スバル「そこ聞かない！！！！！」

シード「はーい…。」

椎名「肉まんおいしい…。」

闇道「あれ？いた？」

椎名「酷いですよその言葉！！！！」

杏「あの～…この近くでアニメフェアしているコンビニありますよ？」

スバル「何！？アニメ！？」

杏「は、はい…。」

スバル「それは見逃せねえええええ！！！！！！！！！」

涼平「俺も行くぞおおおおォ！！！！！！！」

炎「…闇道さん、あの人たちはああゆう人で…。」

闇道「それあたしも参加するうううう！！！！！！！」

炎「あんたもかいいぃぃ！！！！！」

雲雀「どんなのか気になるな～行ってみよ！」

炎「え！？待ってよ～！！」

椎名「…行っちゃったね…。」

シード「行っちゃいましたね…。」

杏「行きましたね…。」

椎名「ってかこの小説大丈夫ですかね…。」

シード「絶対大丈夫じゃない☆」

日常１６（後書き）

続く。

日常１７（前書き）

最近自分の部屋のテレビが壊れているような気がする。

たまに画面が止まったり、いきなり暗くなったり。

しかし、俺一人の時が一番起きやすい。

…何故だ…？

日常17

その日も、いつものように朝布団から目覚めた。

椎名「ふぁ～…よく寝たな～……。」

雷文寺が目を覚ました瞬間動作が停止した。

そりゃそうだ。だって目覚めたらいきなりジャングルの中にいるんだもん。

チンパンジーが木と木の間を軽快に動き回る。

鳥の鳴き声…近くに川が流れているのか川の音も聞こえる。

何故自分がこんな所にいるか、考え込み、一つの事にたどり着いた。

椎名「…またか～…。」

雷文寺は立ち上がり…。

椎名「局長～…またですか～…？」

局長を呼んだ。

涼平「お～さすが雷文寺、慣れているねぇ…。」

涼平の声がしたかと思うとジャングルの光景が消え去り、いつもの部屋の中にいた。

椎名「…で、何でジャングルの光景見せたんですか？」

涼平「いや…起きてあんな光景だったらびっくりして叫ぶかと思ったけど…やっぱり慣れている人って違うね～…。」

そう、あのジャングルの光景は涼平が見せたもの。鳥の鳴き声や川の音も涼平の仕業。

局長こと秋神涼平の能力『幻覚・幻聴を見せる能力』のせいである。

椎名「その能力…あんまり無駄に使わない方がいいですよ？狂撃隊の中で最強と言われているくらいなんですから…。」

涼平「そうだな…次はスバルの悪戯にでも…。」

椎名「おい。」

涼平は話を全く聞いていないがこの能力、雷文寺が言っている通り狂撃隊の中でも最強と言われるほどすごい能力でもある。理由は幻覚で見せる自分を相手と戦わせている間に相手の背後に回り、攻撃すると言う手段を持つ。しかも幻覚のせいで涼平自身が見えなくなると言うこともできる。声も幻聴で聞かせたりするので幻覚を本物と思いこむ相手が非常に多い。

まぁこの能力を使わなくてもただ単に蹴り一発でビルを破壊する涼平にとってこの能力は最後の切り札みたいな存在だけど。

涼平「んじゃ、今日も仕事があるからな～。」

椎名「しっかりしてください。」

本当に無駄に使っている局長である。

日常１７（後書き）

涼平「次はだれに～♪」

椎名「いい加減にしろ！！」

涼平「ぎゃーーー！！！！！！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8395x/

狂撃隊の生活日常

2011年12月7日23時53分発行